（ 様 式 3 ）

論 文 要 旨

Gastro-esophageal reflux symptoms in adult patients with skeletal Class III malocclusion as examined by questionnaire

質問紙調査による 骨格性下顎前突症成人患者の胃食道酸逆流症状

戸 川 玲 奈

【背景および目的】

胃食道酸逆流症（GERD）とは、胃酸や消化酵素を含む胃の内容物が食道へ逆流し、胸やけや呑酸などの症状を示す上部消化器で最も一般的な疾患である。唾液や嚥下、蠕動運動は、食道内のクリアランスを促し、GERD の防止に重要な役割を果たしている。

咬合力の低いものは唾液流出率が低く、咀嚼や嚥下が不十分であると胃の機能が低下すると報告されている。また、歯の喪失などで咀嚼機能の低下したものでは消化器症状が多く認められる。

日本人には骨格性下顎前突症患者が多い。骨格性下顎前突症患者は、咬合力や咬合接触面積、咀嚼能率が低いことから、GERD 症状を含めた消化器症状が多く認められると予想されるが、これまで骨格性下顎前突症患者の GERD 症状について調べた報告はない。

本研究の目的は、骨格性下顎前突症患者の GERD 症状や咬合接触面積、咬合力、唾液流出率を調べることである。

【対象と方法】

対象は、鹿児島大学病院矯正歯科で手術適応の骨格性下顎前突症と診断された患者 19 名（下顎前突群）と、正常咬合（PAR Index＜10）の者 20 名（対照群）である。QUEST 問診票と F-scale を用いて GERD 症状を調べ、咬合力、咬合接触面積と安静時の唾液流出率の測定を行った。2 群間の差の有意性は、t 検定または Mann-Whitney の U 検定で調べた。

【結果】

下顎前突群では、対照群に比べ QUEST および F-scale の値は有意に高く、咬合力は有意に弱く、咬合接触面積は有意に狭かった。唾液流出率では有意な差は認められなかった。

【考察】

咀嚼機能が低下していると考えられる骨格性下顎前突症患者の消化器症状を調べた報告はこれまでなかった。本研究の結果から骨格性下顎前突症患者では GERD 症状が多いことが初めて示された。

喪失歯により咀嚼機能が低下した者では、咀嚼機能を回復することで消化器症状にも改善が認められたと報告されている。このことから、骨格性下顎前突症患者でも、矯正歯科治療により咬合を改善することで GERD 症状が改善する可能性が考えられる。

今後、重度の開咬やⅡ級ハイアングル症例など他の不正咬合患者でも調査を行う予定である。

【結論】

骨格性下顎前突症成人患者には胃食道酸逆流症状が多く認められた。

（American Journal of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics, in press）